

Joseph Conrad; “Heart of Darkness” について

鏡 味 国 彦

Conrad が1899年に完成した “Heart of Darkness” において、Marlow が試みる奥地への旅は、Jerome Thale が “Marlow’s Quest” の中で “The journey to the heart of Africa is the journey into the depths of the self; Kurtz and Marlow travel into the heart of Africa and into the heart of man.” (アフリカ奥地への旅は自己の内部への旅である。クルツとマーローはアフリカの奥地へ、人間の心の中へと旅をする) と言っている様に、一般的に、自己の depths への旅、人間の無意識な心の内部への旅と説明される。勿論、heart of darkness (暗闇の奥) への旅は hidden self (隠れた自己) と、悪をなす人間の可能性とを探究しようという symbolic な表示であり、Conrad 自身 “Before the Congo I was just a mere animal.” (コンゴに行くまで私はただの動物にすぎなかった) と述べている様に、彼自身の自己探究への長い長い旅路と考えられる。

然しながら、Conrad は単に psychological な経験を narrate しているのではなく、非常に意味深い moral conflict (道徳的葛藤) を扱っている。もし、この物語が、単に人間の二つの精神面——意識と無意識——とを扱ったものにすぎないならば、Congo における土民の状態をかくも広範囲にわたって描いた Conrad の主眼は何であったろうか。更に、Conrad の力強い、首尾一貫した imagery (比喩的表現) を研究しないで、物語の theme の発展に重要

な Kurtz の "Intended" (許婚) の果す役割を説明する事は不可能である。"Heart of Darkness" の中で, Conrad は Marlow が如何にして悪を見出し, 如何にして自分に課せられた義務, 他人に課せられた義務を発見して行くかを描いている。Marlow の自知達成を語るのに, Conrad は psychology の言葉を用いなくて, 伝統的な Hades (冥府) への旅の imagery と symbolism とを用いている。Marlow の旅に地獄への下降を連想させることにより, Conrad は inner self (内なる自己) の隠れた世界を具体化しようとする。Image と symbol を通して, 彼は, 読者に古代の epic (叙事詩) において, 下界を探究し, そうすることにより自己の conscience と国民の conscience を探る英雄の旅を呼びおこさせようとする。この様な point of view から "Heart of Darkness" を研究すると, いくつかの興味深いパラレルを見出す事が出来る。更に重要な事は, この様な読み方により, Conrad が伝統的な叙事詩に見られる地獄への下降の imagery と, 彼自身の Congo での経験の details を結合することによって, 如何に近代人にも信用出来る様な地獄の image を創造したかを知る事が出来るであろう。

(一)

上述の如く, Marlow の旅は, 一般的に, 叙事詩に見られる地獄への下降を思いおこさせるが, それは特に, Virgil の "Aeneid" の Book IV における Hades への旅に関連がある様に思われる。Virgil の詩での, Aeneas の下降は, Rome 人のリーダーとしての役割を果すべき Aeneas の義務を意味する。Virgil は真実とは闇の奥において見出されるという事実を強調する。かくして, Virgil の言葉によれば "hides truth in darkness" (闇の奥に真実を隠している) Sibyl が Aeneas を導いて行く。

(1)
Aeneas が丁度 Hades に入ろうとする時, Virgil は地の暗闇と深淵とに埋もれている secrets を示すために, narrative を中断し, 地獄のエレメントと, 混沌, Phlegethon とを描く。Aeneas の Hades への旅は人間の affairs の中

に暗に含まれている悲劇を、彼が学ぶための一つの手段である。この旅は Aeneas が Rome の創立者としての義務を果すのに支払わねばならない代価である。下界において、彼は過去と未来を見、そこに personal な罪に対する刑罰を見、ローマ人の道義心上に重くのしかかっている流血と残忍性——即ち、Rome 帝国の支払うべき代価を見る。敬虔な価値ある男 Aeneas は暗闇・地獄への下降を通して、Marlow 同様、真実を見出すのである。

Marlow の旅と、光を求めて Hades へ下降する叙事詩の英雄との basic な類似性は明らかであり、二つの旅の間には証明されるべき多くの密接なパラレルがある。

“Aeneid” の Book IV の最初の所で、Aeneas が Hades へ下降する前に、Virgil は滲みわたる様な陰うつな雰囲気を作成する。彼は “The gloom of the forest” (森の陰うつ) と語り、⁽⁸⁾ “Through the gloom” (暗闇を通して) と繰り返す。⁽⁴⁾ 同様に Conrad も又、陰気な mood を create する。Conrad は Marlow の物語を聞くために集った人を描くにあたって、繰り返し繰り返し “gloom” という語を使っている。第二のパラグラフで、彼は “mournful gloom” (悲しげな暗闇) と語り、⁽⁵⁾ 第三のパラグラフでは、 “the brooding gloom” (覆ひかぶさる暗鬱さ) と言い、⁽⁶⁾ 第四のパラグラフでは “the gloom to the west” (西方への暗澹さ)、⁽⁷⁾ 第五のパラグラフでは “the goom brooding” (垂れ籠めた暗鬱さ)、⁽⁸⁾ 第七のパラグラフでは再び “a brooding gloom” と語っている。⁽⁹⁾

又、Marlow は物語を始める前に、Thames 河を見渡しながら、Rome 人や英国の征服者達について、 “They were men enough to face the darkness. ……They were conquerors.” (彼等は闇黒に真正面から挑んだ人達であった。……彼等は征服者だった。) と言い、⁽¹⁰⁾ 更に彼等の残忍性について、 “It was just robbery with violence, aggravated murder on a great scale. ……Conquest ……is not a pretty thing ……what redeems is the idea

only. An idea at the back of it; not a sentimental pretence but an idea; and an unselfish belief in the idea—— something you can set up, and bow down before, and offer a sacrifice to.” (それは大きなスケールの凶悪な殺人、暴力を伴った掠奪にすぎなかった。……征服はきれいな事ではない。……償うものは、ただ観念だ。征服の後にある一つの観念。センチメンタルな見栄ではなく、一つの観念である。その観念を没我的に信ずる事だ。貴方達が仰ぎ、前にひれ伏し、進んでその犠牲となるような観念の事である) と語る。

この Marlow の言葉に内在するものは、“Aeneid”の theme そのものである。何故ならば、Virgil も又、この考え、即ち Rome 人の略奪と残忍性を弁護しようという試みを行っている。

この様に、“Heart of Darkness” のでだしにおいて、Kurtz の行為と、Virgil の描く地獄以上に恐ろしいジャングルで Marlow が自知を完成するための background として、Hades において予言され、正当化された Rome の伝説が準備されている。

Marlow は暗闇の奥へ分け入る前に、叙事詩の英雄 Aeneas 同様、いくつかの義務を果さねばならない。彼は旅行の手続きを取るべく company office へ行く。この訪問は、致命的な旅に出る前に彼が果たすべき必然的な rite を暗示している。彼は町そのものが白塗の墓の様だと感じ、家々は死の町の中にある様に感じる。この様に、Conrad は Marlow がまさに入って行こうとしている世界の死んだような暗澹さを create する。

company office に入ると二人の女性が黒い毛糸を編んでいる。Conrad はこれらの女性を Aeneas のガイドである The Sibyl of Cumae 同様に、暗闇の奥に存在する secrets を知るところの運命を司る女性を象徴するものとして用いている。

さて、Marlowは company office で、手続きの仕方に慣れないのと、部

屋内の空気に何か凶兆の様なものを感じて、不安になる。そして、編物をしている女性の一人を、“She wore a starched white affair on her head, had a wart on one cheek, and silver-rimmed spectacles hung on the tip of her nose. She glanced at me above the glasses. The swift and indifferent placidity of that look troubled me.” (彼女は頭に何か白い、糊で強張ったものを被っており、片方の頬に痣があって、鼻の先に銀縁の眼鏡をかけていた。彼女は私を眼鏡越しにジロジロ見た。その素早い一瞥が、何か無関心な物静なものであったので、私は不安を感じた。) と描写する。彼女は凡ての事を見通している様に思われる。Marlow はつづいて、“An eerie feeling came over me. She seemed uncanny and fateful.” (私は何か不気味な気持ちに襲われた。彼女が気味悪く、不吉に思われた。) と述べる。the Sibyl of Cumae の様に、この二人の夫人は地獄の門番、案内人の役割をしている。

“Often far away there I thought of these two, guarding the door of darkness, knitting black wool as for a warm pall, one introducing, introducing continuously to the unknown, the other scrutinizing the cheery and foolish faces with unconcerned old eyes.” (しばしば、私は遠く離れてからも二人の女、一人は温い棺衣にするのか黒い編物をしつつ、闇の門を守って一人又一人と未知の世界へと案内している女、他の一人は、陽気な馬鹿の様に人の好い顔を無関心な目で観察している女——を思い出す)

それから、Marlow は女に “Ave! old knitter of black wool. Marituri te Salutant.” (元気で! 黒い編物ばあさん。将に死に赴く者より) と叫ぶ。この “Marituri te Salutant.” という別れの挨拶は死を覚悟した古代 Rome の闘士が闘技の前に皇帝に対して述べたもので、明らかにラテン叙事詩との関連性を呼び起させるものである。

Conrad は “Heart of Darkness” の中で、たえず、死の image を用いている。Aeneas の様に、Marlow は闇の奥へ下降する前に、死んだ人の亡き骸

を処理しなければならない。Aeneas は、彼の僚友 Misenus の死体を埋葬する。そして、Marlow も彼の前任者 Fresleven の死体を処理する様に強いられる。“Nobody seemed to trouble much about Fresleven’s remains, till I got out and stepped into his shoes.” (誰一人、フレスレーフェンの亡き骸の事など気にもかけなかった様だ。私が行って彼の後がまになるまでは)と彼は言う。“I could not let it rest though.” (けれど私はそれを放置しておくことは出来なかった。)

Marlow が Congo を最初に観察するにあたって、Conrad は再び地獄の imagery を用いる。一つの鎖に繋がれた囚人達は Marlow の目には死の様な無関心なもの (deadlike indifference) として映る。Marlow は一步木陰に足を踏み入れるや否や、“It seemed to me that I stepped into the gloomy circle of some inferno.” (私にはまるで暗澹たる地獄に足を踏み入れたように思われた。) と感じる。“inferno” という語は、勿論、Laten の “inferna” 同様、キリスト教的な地獄を暗示するものであるが、Conrad の用いる image の発展は Virgil の “Aenied” における Hades の描写に非常に似ているので、それはキリスト教的な地獄というよりむしろ classical な地獄を思わせる。Conrad のジャングルにおける土人の描写は、Virgil の Hades 中の苦るしみ悶える “shade” (亡霊) に酷似する。例えば、“Black shapes crouched, lay, sat between the trees leaning against the trunks, clinging to the earth, half coming out, half effaced within the dim light, in all the attitudes of pain, abandonment, and despair.” (黒い人影が、木々の間に蹲り、寝そべったり、幹に凭れて座ったり、地面にはいずり、かすかな光の中に、あるものははっきりと、又あるものは半ば影の様に見え、その上苦痛と自暴自棄と絶望の様子をしていた) という描写は、Virgil の “And there dwell pallid Diseases and sad Old Age, / Fear and ill-counselling Hunger and shamefull Want, / Shapes that are dreadful to look on, and Death

and Distress” という描写を思わせるし，“Aeneid” の shapes (亡霊)同様，
 “Heart of Darkness” の土民達は “nothing earthly now,——nothing but
 black shadows of disease and starvation, lying confusedly in the gree-
 nish gloom” (最早，この世のものではなく——うす暗い闇の中に乱雑に横た
 わっている病苦と飢えとの黒い影にすぎないもの) であり，瀕死の人影であり，
 地獄で苦しむ悶える亡者の如く風のように自由であり，風のように痩せ細ってい
 る。Marlow は “One, with his chin propped on his knees, stared at
 nothing, in an intolerable and appalling manner; his brother phantom
 rested its forehead, as if overcome with a great weariness; and all
 about others were scattered in every pose of contorted collapse, as in
 some picture of a massacre or a pestilence.” (両膝の上に顎をおいている
 一人は何を見るでもなく，ぞっとする様な恐ろしい態度をしていた。仲間の亡
 霊は疲労に征服されでもしたかの如く，前額を膝頭に休めていた。その他にも
 あたり一面に，さながら虐殺か悪疫の図でもあるかの様に，凡ゆる悶死のポ
 ーズで，同じ様なものが散ばっていた。) と語る。この光景を見た Marlow は
 気分を悪くし，最早木陰を歩く気になれず，事務所に戻るが，そこでも文
 明のシンボルである垢抜けした服を身に纏った agents ときちんと整理された
 帳簿に囲まれて “the grove of death” (死の森)だと感じる。
 (23)

Conrad は suspense をふんだんに盛り上げ，Marlow の旅がありきたりの
 安易なものではないという事を間接的に，私達読者に語るために，Hades の
 symbol と image を用いている。彼は古代叙事詩“Aeneid”に描かれた地獄に
 秘められた不可思議さ，神秘さ，ペーソスとを巧みに利用するのみならず悪を
 も暗示しようとして，“Aeneid”の地獄に一層新しい brilliance を加えている。
 更に，Conrad は，地獄の symbol を通して，彼の theme と登場人物の悲劇
 的な proportions を示す。Marlow は出張所で待っている間に，茫漠たる惹
 蕪さが罪悪か又は真理にも似た偉大な圧倒する様な力をもって，自分に押し掛

って来るのを感じるのである。ある夜、キャラコ、更紗、ガラス玉等の入っている藁葺きの小屋が、火を吹いた時、Marlow は "You would have thought the earth had opened to let an avenging fire consume all that trash."⁽²⁴⁾ (君達は多分まるで大地が復讐の火を吹き、一切のガラクタ類を焼き尽すと思った事だろう。) と語る。

Marlow がジャングルの奥深く分け入るにつれて、地獄の image は一層強烈になる。そして、ついには、Congo 自体があたかも地獄さながらと化して行く。Aeneas が Hades に入る時、Virgil は underworld と森とを compare する。ここでも、Conrad と Virgil との著るしいパラレルが窺える。Erebus の深淵に到着するために、Aeneas は沼地に囲まれた Styx 河を下らねばならない。彼の乗ったボートは、その旅には不適當なものに思われるが、四苦八苦の末、Aeneas は、ついに岸边に足を踏み入れる。Virgil のこの旅の描写は極めて簡潔なものであるが、彼は、Conrad が Marlow の奥地への旅で示したと同様に、陰うつで厭わしい雰囲気をかもし出す。Marlow も又、自分の航海に不似合なボートで困難な旅をする。彼と乗組員とは幽霊の様に見え、大地はこの世ならざるものの様に見える。彼が近づきつつある黒人達の不可思議な狂歡に満ちた土地はジャングルであり、先時代人の土地、Kurtz が創造し、亡びて行った地獄の深淵である。Marlow はジャングルに入った時、自然界さえもがこの世のものでない様に感じる。彼は蕙かずらその他の数知れぬ灌木に絡まれた樹々の群は、一本のささやかな梢、一枚の軽るい葉末まで、凝然とした石に化してしまった様だと感じる。彼は自分の感情を "It was not sleep——it seemed unnatural, like a state of trance."⁽²⁵⁾ (それは眠りではなく、昏睡状態に似た、不自然なもののようにであった) と語る。土人達の悲し気な叫びは、地獄の亡者達の呻き声を思わせる。Marlow にとっては、"その他の世界は、眼で見る限り、聞こえる限り、ただ一つの無の世界だ。覗き一つ、影一つ残さず、完全に消えて行ってしまった" 様に思われる。

(90)

Marlow は、暗闇の中心地にほぼ近づいた時、舵手を失ってしまう。ここでも、Conrad は再び Virgil に従っている様に思われる。Marlow 同様、Aeneas も Cumae の岸に近づいた時、舵手 Palinurus を失う。Palinurus はバランスを失って水面に落ち、無事岸に泳ぎ着いた時、野蛮人が槍で彼を攻撃し、殺してしまう。そして、彼の死体は海に漂よう。Marlow の舵手も又、土人の槍にたおれ、海に葬むられる。二人共、何の罪もなく、リーダーの為に忠実に死んでいった。Aeneas は Hades で Palinurus の亡霊に会い、自分の使命のために払われた悲劇的な犠牲を知る。一方、Marlow は舵手の死んだ顔に忘れる事の出来ない profound な近親性を感じる。土人の呻き声以上に、この死んだ舵手の無邪気な profound な表情は Kurtz の裏切りの悲劇的な consequence を示している。Kurtz は未開の地に光を与えるべき使者として奥地に赴き、逆にその世界を崩壊して行ったのである。

Kurtz に関して述べる際にも、Conrad は絶えず地獄の imagery を繰り返す。Marlow は、いかに荒野の愛撫が Kurtz を萎ませ、彼を魅惑し、愛し、抱擁し、逐には、彼の血管の中に忍び込み、彼の肉を啄み、最後には、いかに彼の魂すら神秘的にして、理解し難い悪魔の誓約によって荒野の魂に結びつけられてしまったか、いかに彼が荒野に甘やかされ、亡ぼされていたかを語る。そして、Marlow はいかに夥しい暗の力が、Kurtz の魂を占めていったかを考えて慄然とする。更に Marlow は Kurtz に関して、“He had taken a high seat amongst the devils of the land. I mean literally.” (彼はこの国の悪魔共の間にその首位の座を占めた——文学通りに)⁽²⁶⁾ と語る。この様に、Conrad は Kurtz を“地獄の狂喜した悪の力”のシンボルとして用いている。然も、Kurtz は悪の spirit を象徴すると同時に人間との identity をも保ちつつけている。そして、Conrad は Kurtz を悪魔と呼ばず“shade”と呼びつつける。彼は Hades の亡霊に対して Homer や Virgil 的な言葉を使うことに依り、Kurtz が previous な存在であった事を暗示している。Marlow は言う。

I am trying to account to myself——for——Mr. Kurtz——for the shade of Mr. Kurtz. This initiated wraith from the back Nowhere honoured me with its amazing confidence before it vanished altogether.

(27)

(私はただ私自身に対して——クルツ氏——いやクルツ氏の亡霊を説明しようとしているのです。秘義を伝えて無可有の奥から来て、この亡霊は、私に驚くべき確信を残して、消えて行ったのです)

この様に Conrad は最初 Kurtz を "Mr. Kurtz" と呼び、次に "the shade of Mr. Kurtz" と呼び、更には "it" と呼んでいる。

Marlow が Kurtz の残忍な儀式の詳細について聞くのを拒む際に、Conrad は再び地獄のイメージをエンパサイズする。Marlow は、

'I don't want to know anything of the celemonies used when approaching Mr. Kurtz'; I shouted.

Curious, this feeling that came over me that such details would be more intolerable than those heads drying on the stakes under Mr. Kurtz's windows. After all, that was only a savage sight. (いかにクルツ氏の所に近づこうとも、そんな儀式の事は何も知りたくない⁽²⁸⁾と私は叫んだ。不思議な事だが、どうせそんな話は、クルツ氏の窓の下の杭の先につるされた乾枯らびた首よりも、もっと堪まらない話に違いないという気がした。結局、これも又蛮習の一つにすぎなかった。)

と語る。然しながら、その時、Marlow を恐怖に陥れたものは、何か一瞬の間に、恐ろしい暗黒の世界へ運び去られる様な気がした事であった。彼にと

(92)

って、それに比べれば、ただの直情、卒直な蛮習の方が、むしろほっとする様な救いであった。かくの如く、Conrad は現実のジャングルと Kurtz の棲息地とをコントラストし、現実の蛮習の方が Kurtz の住む地獄の恐怖より救いだと述べる。

Kurtz のみならず、彼のまわりの凡ての者が、Congo における現実の姿と、Hades におけるシンボリックな姿との両面を有している様に思われる。例えば、土人達は遙か彼方の暗い森の緑を背景に、動いているというより、なにか頻りに軽ろやかに飛んでいるような影として描かれているし、土人の女は右から左へ、何か奇妙な、華麗な、まるで幻のように動く女として描写されている。そして、Kurtz はクライマックスに達するにつれて、益々、地獄の creature の様相をていしてくる。Marlow は Kurtz, 又は彼が呼ぶ様に Kurtz の shadow (影) に是非とも会いたいと思ひ、彼を追って、彼が極悪な儀式を行っているジャングルの奥地深く分け入って行く。彼等の出会を描写するに際しても、Conrad は繰り返し繰り返し Hades を連想させる。Marlow が近づいた時、Kurtz は足許が定まらないらしく長い、青ざめた、貧弱な身体をして、まるで蒸気のように、音もなく、霧のように立上る。この場の Setting も、木の間越しに、火影がぼんやりと夜空に映え、呟くような夥しい人声が洩れて、あたかも地獄さながらである。Marlow の前に悪魔の形相をした Kurtz が現われる。Marlow は、奥地で信じ難いほど墮落のうちに陶醉している Kurtz を統御するのに一つの手段を用いる。即ち、それは、“You will be lost, ……
⁽²⁹⁾utterly lost.” (君は駄目だよ……全く駄目だよ) と言って脅迫することである。此等の言葉で Kurtz はたじろぐのであるが、それでも Marlow は、Kurtz を考察しながら、“I before him did not know whether I stood on the ground or floated in the air.” (彼の前に立った私は、私自身が果して地上に立っているのか、
⁽²⁹⁾空気中に漂っているのか分からなくなってしまった) と言う。何故ならば、彼等はまだ地獄から立去っていないからである。事実、明

くる日の旅も、単に地獄の image を繰り返しているにすぎない。Virgil の Hades の哀れな亡者達が Aeneas のボートを眺めている様に、木の間より土人の集団が再び森の奥より殺到して、互に眩やき、奇妙なジェスチャーをしながら岸に立って見送っている。更に、海へ連れて行ってくれる様に嘆願して両手を拡げている Virgil の亡者の様に、土人の女が悲痛な表情で、両腕をいっぱい伸ばしたまま、暗鬱に光る河の面に、いつまでも彼等を見送っている。

Kurtz が話す時、Marlow は彼の言葉が、何か超自然的な力からはき出されたものの様に感じる。何故ならば、船上でも、Kurtz は依然として shade (影)として描かれている。Marlow は Kurtz の本来の姿は、すでに空虚な形骸となった Kurtz の枕辺に影の様に訪れて来たと言う。この様に、Marlow は、高揚な思想と経歴と、出張所と、許婚とを持った本来の Kurtz は、その経歴の絶頂においてもインポテンツであり、遂には空虚な形骸へとおちぶれて行った“影”にすぎなかった事を仄めかしている。Marlow は Congo を離れる時でさえ、依然として、その影響下にある。彼は “………this choice of nightmares of forced upon me in the tenebrous land invaded by these mean and greedy phantoms.” (下劣な、貧欲な亡霊共の侵入に任されていた陰うつな土地の中で、我にもなく押しつけられた悪夢)を受け入れる。⁽⁸⁰⁾

Kurtz の “The horror” (恐怖だ) という断末魔の叫びは、土壇場で彼が改心したという事を示しているのではなく、Conrad は、この失われた魂、この暗い影も又人間であるということを示す手段としてそれを用いたのである。もし、Kurtz が最後の瞬間において、自分の人生を顧みて、恐れ慄く程の人間性を持っていなかったとしたならば、彼の崩壊は何を意味するであろうか。Conrad は現実のジャングルと、遂には地獄と化す Kurtz の世界とを弁別すると同時に、かつては人間であったが、しだいに地獄の亡者へと墮落して行ったが、尚恐怖に怯えて “The horror” と叫ぶ程の人間性を保持していた Kurtz の姿を巧みに描いている。

Kurtz の死後、彼に対する Marlow の思い出は、凡ての人間がその人生において一つ一つ積み重ねて行く、世の中の故人のものとは異っている。Marlow の眼に、Kurtz は地獄の shade (亡者)、永久に苦痛と陰うつさを示すもの、夜の闇より尚暗い幻影として映る。

Marlow は Kurtz の許婚の家に入って行く時、闇の奥の陰うつさと恐怖とを胸にひしひしと感じる。Marlow は言う。

The vision seemed to enter the house with me—the stretcher, the phantom-bearers, the wild crowd of obedient worshippers, the gloom of the forests, the glitter of the reach between the murky bends, the beat of the drum, regular and muffled like the beating of a heart—the heart of a conquering darkness. (担架、まぼろしの担ぎ手、⁽³¹⁾ 帰依者の狂暴な群衆、森々の陰うつさ、深い暗闇がおおいかぶさった河筋の光彩、心臓、勝ち誇る様な闇の心臓の鼓動のように規則正しく、低く、高くひびく大鼓の音等一切のものの幻影が私と共に家の中に入ったかの様に思えた。)

更に、Kurtz の許婚も、彼同様、ありきたりの人物として描写されてはいない。彼女も又下界・地獄の住人の様に思われる。彼女は Kurtz の地獄に住んではないが、まるで掃除の行きとどいた静かな墓場の小径に、床から天井までとどく長い窓が三つ、それがまるで、布巻きの柱のように白々と光っている部屋に住んでいる。そして、彼女のピアノは、磨き上げた石の棺の様に、沈痛な光沢をたたえている。血の気のない顔をして、まるで揺曳でもするように、薄闇の中を Marlow の方へやって来る黒装束の女、清純な額に何かほのかに灰白色の光輪でも漂っている様に見えるこの女性は、“the Intended” という抽象的な名前より与えられていないが、これは、Marlow が “I saw her and

him in the same instant of time——his death and her sorrow——I saw her sorrow in the very moment of his death. I saw them together——I heard them together.” (私は、彼女と彼——彼の死と彼女の悲しみとを同一瞬間に見た。又、私は彼の死の瞬間において彼女の悲しみを見た。……私はそれらを同時に見、同時に聞いた) と言っている様に、彼女は Kurtz を離れて何ら存在しないからである。Imagery を通して、Conrad は彼女も又 Hades の住民の一人であり、彼女の住む section は、秘密をもった patient な、失望した亡者達にあてられたものだという事を示唆している。この夫人訪問は、Hades への Marlow の旅の最後の lap である。彼女の信仰は、闇の奥に、この世ならぬ神の様に光り輝くものであるが、彼女は、Marlow の眼には、永遠の闇として映る。Marlow は彼女に話しかけながら、自分の生きている限り、幻の姿 Kurtz を見つづけるであろうし、それに又この女の悲しみの靈魂を見つづけ、身体中に効のないおまじないを飾り、地獄の流れ、暗黒の流れの夕映にあらわなかつ色の腕を差しのべていた女の姿を忘れないだろうと確信する。この様に、Conrad は地獄の流れの image を通して二人の shades (亡者) を結びつける。

(二)

これまで、私は Kurtz の世界と彼の影響力とを示すために、Conrad がいかに地獄の imagery を用いたかを一貫して述べてきた。この様な読み方は、全体として、何ら新しい物語の解釈を与えるものではなく、むしろ長い間認められて来た View の説明でしかないかも知れない。が、兎に角“Heart of Darkness” には三つのレベルの意味が含まれている事は可成り明白である。まず、第一にそれは一人の人間の冒険物語——ミステリーとエキゾチックな setting, 逃亡とサスペンス等々をふんだんに盛った冒険物語であり、第二に、アフリカに於ける白人の生態を発き、開拓事業への不信と批判を加えた物語、Marlow

が政治的社会的不正を発見する物語であり、第三に人間精神の神秘さを探求する物語とも考えられる。

同じように、私達読者は、Virgil の “Aeneid” の Book IV にも、この三つの意味を見出す事が出来る。Aeneas 同様、Marlow はこの三重の経験を通し、自己を知り、自分の義務を知り、人間の限界を知る様になる。又、Kurtz は、Aeneas の様に、ジャングルの奥地に光明をともしべき使者として、出発して行くが、Virgil の英雄と違って、自己を征服する事が出来なかった。一方、Kurtz の経験を通して、Marlow は闇の奥地で、人間というものはその work によって、真意が明らかにされる事を学ぶ。Kurtz は光をともしべく分け入ったジャングルで墮落し、象牙をかき集める欲望の鬼と化し、そこを地獄にしてしまい、遂にはその地獄で亡びていった。以上見て来たように、この小説中の地獄の symbol は古代社会と近代社会の想像的結合 (imaginative union) を示しているのみならず、近代社会の道徳に対する一つの judgement をサジェストしているように思われる。

古代叙事詩における下界への下降は常に、真実を知る人を求めての旅であった。Marlow は Congo へ足を踏み入れる以前から、自分の旅の真の目的が Kurtz に会い、彼と話し合う為である事に気付いている。そして、Kurtz と遭遇した時、Marlow は彼の内に同胞に対して言い知れぬ罪を犯した人間の姿を見ると同時に、悪の深淵にまで身を持ち崩してしまった人間の姿を見出す。この様な彼の姿を見て、Marlow は凡ての人間がこうなる可能性がある事を強く感じる。換言すれば、彼は凡ての人間の心の中に存在する地獄を発見するのである。

Congo には、何一つ超自然的な物は存在しない。凡ての物が、表面的には、リアリスティックに、読者が信用出来る様に描写されている。然しながら、超自然的な物を暗示するために、地獄の imagery が巧みに用いられており、光を奥地にともしさんとして出発し、逆に、裏切者となっていった Kurtz が直面し

なければならなかった恐怖と苦悩とを仄めかしている。そして、地獄の imagery を通して、Conrad は Congo における Kurtz の苦悩を内面的頓挫 (inner defeat) の象徴としている。Kurtz は一方においては土人達を裏切り、彼等を貧困と阿諛の状態に零落させると同時に、他方では、自分の内なる人間性を欺いたのである。彼は土人達を苦痛に悶え苦しむ亡者にまで墮落させ、彼等から、意志と威厳とを奪い、そうする事によって、自分自身をも亡者と化してしまった。彼の意志は、いわば、彼自身の恐ろしい気まぐれの犠牲であり、召使だったのだ。

Marlow も又、地獄の恐怖に直面するが、彼はそこから逃亡する事が出来た。その結果、彼は智(wisdom)を得た。この点に関して、彼は Kurtz に負う所が大である。何故ならば、Kurtz は、小説中の他の白人達の無感動、無頓着さ、卑小さ、温室的な生き方と異なり、地獄まで堕ちて行った烈しさを持っており、地獄にまっこうからぶつかっていった。更に、彼は地獄の挑戦に尾をまいて逃げる他の使者達と違い、失敗はしたけれども、その不気味な世界を勇敢に探求して行った。Kurtz の失敗を通して、Marlow は自分自身の悪をなしうる可能性と、それに反抗しうる可能性とを学んだのである。アイロニカルに言えば、Marlow が 地獄のエレメントに勝利をおさめたと言う事は、彼が人間の限界と自分の限界を知ったという事である。Marlow が "I did say the right thing, though indeed he could not have been more irretrievably lost than he was at this moment, when the foundations of our intimacy was being laid—to endure—to endure—even to the end—even beyond." (あの時の彼ほど、言い知れぬ絶望状態にあったものはなかったけども、正に私は至言をはいたものだ。そして実にこの時、生涯を超えて続く私達の友情の基礎が出来たのだ)と言っている様に、彼は Kurtz を一方では斥けながら、他方においては、彼に忠実である。この忠実さの故に、彼は凡ての人間がいくたびとなく遭遇し、征服され、征服してきた、心の中にひそむ地獄が永

(98)

久に存在する事を知ると同時に、人間には永久に敗北する可能性があるという悲劇的な知覚をも得るのである。

(三)

私は、Kurtz の “Intended” (許婚) が彼同様、shade (亡者) に似ていると前述した。事実、Conrad は彼女を “Intended” という抽象的な名で呼び、Imagery を通して、彼女を死の世界と結びつけようとする。土人達同様、彼女は彼を信ずる余り、生きている凡てのものを犠牲にする。Marlow はある時、皮肉をこめて、彼女を、**“thunderingly exalted creature as to be altogether deaf and blind to anything but heavenly sights and sounds.”** (神の姿、⁽³⁴⁾音以外に何一つ聞えない、見えない途方もない人間離れした聖人) と語る。その様な人間にとってこの世はただの呼吸する所である。Marlow は、逆に多くの人にとって、地上は **“A place to live in, where we must put up with sights, with sounds, with smells, too by Jove——breathe dead hippo, so to speak, and not be contaminated.”** (生活する所だ。種々の光景、音⁽³⁵⁾そして臭気等をじっとこらえなければならぬ所だ。いわば、河馬の腐敗した肉をかぎつつ、然も毒気に当らない様にしなければならない所だ。) と言う。Kurtz の “Intended” は崇高な理想のために、人生を犠牲にしている。彼女は死んだ河馬の腐肉をかぐこともなく、暗闇に直面することもない。彼女も Kurtz 同様、死を選んだ。彼は inhuman な罪に征服されたが、彼女は inhuman な無垢さと、人生に直面することをいさぎよしとしなかったために、人生の醜悪さと罪とを知るのをいさぎよしとしなかったがために征服された。然し、Marlow は彼女に真実を述べない。Kurtz に対する忠実さのためか、人生に直面するのをいさぎよしとしなかったために shade (亡者) となった夫人に、死んだ河馬や世の種々の光景、音、臭気の様な残忍な醜悪な真実を話すことの無用さを感じたためか。

かくして、彼女が Marlow に Kurtz の最後の言葉が何であったか聞かせてくれと頼む時、彼は“地獄だ”という Kurtz の言葉を告げずに、それは貴女の名前でしたと嘘をつく。これが、Marlow の死の世界への最後の贈物であり、儀式である。そして、Marlow の奥地への旅は終る。

Conrad はかつて、“芸術家は、自分自身の内部に入っていかなければならない。そしてその緊張と闘争の孤独な領域で、もし運が良ければ、彼は人にアピールする様な terms を見出す事が出来る”と語り、又“Victory”では“*It is not poets alone who dare descend into the abyss of infernal regions, or even who dreams of such a descent.*”⁽³⁶⁾(下界の深淵にあえて下降しようとしたり、又はその様な下降を夢見るのは詩人のみではない)と語っているが、彼は“Heart of Darkness”において、芸術家のみならず、もし凡ての人が自己を理解しようとしたならば、入っていかなければならない型のない領域・人間性の闇の奥を創造するために、Hades の symbolism と imagery を用いたのである。(完)

Notes.

1. Sibyl 古代の巫女中で殆りに有名なイタリアのキューミーの巫女
2. Phlegethon 地獄の火の河
3. Virgil; *The Aeneid* (London; J. M. Dent & Sons, 1957), p. 120.
4. Loc. cit.
5. Joseph Conrad; *Heart of Darkness* (New York; Dell Publishing Co., 1962), p. 27.
6. Loc. cit.
7. Ibid; p. 28.
8. Loc. cit.
9. Loc. cit.

(100)

10. Ibid; p. 31.
11. Ibid; pp. 31—32.
12. Ibid; pp. 36—37.
13. Ibid; p. 37.
14. Loc. cit.
15. Loc. cit.
16. Ibid; p. 35.
17. Loc. cit.
18. Ibid; p. 44.
19. Ibid; pp. 44—45.
20. The Aeneid; p. 121.
21. Heart of Darkness; p. 45.
22. Loc. cit.
23. Ibid; p. 48.
24. Ibid; p. 53.
25. Ibid; p. 74.
26. Ibid; p. 87.
27. Ibid; p. 88.
28. Ibid; p. 100.
29. Ibid; p. 110.
30. Ibid; p. 112.
31. Ibid; p. 119.
32. Ibid; p. 121.
33. Ibid; p. 109.
34. Ibid; p. 87.
35. Ibid; p. 88.

36. Joseph Conrad; *Victory* (New York; The Modern Library), p. 207.

参 考 文 献

Megroz, R. L; *Joseph Conrad's Mind and Method.*

Kettle, A; *Introduction to the English Novel.*

Haugh, R.F; *Joseph Conrad.*

Warner, O; *Joseph Conrad.*

Leavis, F. R; *The Great Tradition*